朝日新聞　2010年(平成22年)9月29日　水曜日

私の視点

故宮展の日本開催

差し押さえ免除法が必要

台北駐日経済文化代表処代表
馮（ひょう）　寄台（きたい）

61年前、共産党との内戦で敗れた国民党の蔣介石総統は、200万人の軍人や公務員などと共に中国大陸から台湾に撤退した。その際、北京の故宮博物院などが収蔵していた文物60万点余も台湾に運ばれた。その文物をもとに、1965年に開館したのが台北の「故宮博物院」である。

書聖・王羲之の「快雪時晴帖」、詩人・蘇軾の「寒食帖」、白菜をかたどった翡翠（ひすい）の名作「翠玉白菜」、磁器の最高傑作とされる「汝窯磁器」など、中華文明の至宝を集めた台北故宮の収蔵品は世界の愛好家を魅了してきた。台湾を訪れる外国人観光客は日本が最も多く、年100万人以上の日本人観光客の多くが故宮を参観している。

台湾は過去、さまざまな国々から故宮展の開催を要請されてきた。ただ、台湾と中国との対立のため、文物を海外で展示する際に中国から差し押さえ請求が起こされる懸念があるという特殊な事情を故宮は抱えている。91年に初の海外展を行った米国では当時、海外の文物から第三国による差し押さえを免除する法律を整備した。98年にフランス、03年にドイツ、08年にオーストリアで故宮展を開催したが、それぞれ同様の措置を講じてくれた。

ところが、残念なことに隣国である日本で故宮展の実現に至っていないのである。台湾、日本双方とも故宮展を望んでいないわけではない。むしろその逆である。馬英九総統は2年前の就任後間もなく、故宮展を日本で行いたい方針を表明した。日本でも、本当に多くの人たちから「故宮の日本展はまだでしょうか」と質問を受けた。

故宮展に向けた唯一の障害は、差し押さえ免除の法律の問題なのである。

最近は日本社会でもこの問題への関心が高まりつつある。今年の通常国会では、超党派の国会議員による差し押さえ免除法案が提出される動きもあった。しかし、参院選で法案提出は先送りされてしまった。

馬総統は台日関係の発展を目指して、09年を「台日特別パートナー関係促進年」に指定。今年10月末から台北の松山空港と東京の羽田空港間で毎日8便のシャトル便を運航させることになり、台湾の政治大学に「現代日本研究センター」を設立した。そして、今後の最重点課題として日本での故宮展実現を位置づけている。

歴史的、文化的に中国と交流を重ねてきた日本人は、世界で最も故宮文物の価値を深く理解している外国であろう。世論調査などで、台日双方の好感度が高いことも確認されている。こうした日本の方々に、台湾が誇る故宮の文物を直接ご覧いただくことは、台日関係のさらなる強化に役立つはずである。臨時国会でもし、差し押さえ免除法案が提出され、成立していただければ、我々も全力を挙げて日本側と協力を進めたいと考えている。

投稿は〒104・8011（住所不要）朝日新聞オピニオン面「私の視点」係か、siten@asahi.comへ。新規の原稿に限ります。電子メディアにも収録します。